(19)日本国特許庁(JP)　(12)特　許　公　報(B2)　(11)特許番号
特許第3553151号
(P3553151)
(45)発行日　平成16年8月11日(2004.8.11)　(24)登録日　平成16年5月14日(2004.5.14)

(51)Int.Cl.[7]　F I
B60J　3/02　B60J　3/02　S

請求項の数 1　(全 5 頁)

(21)出願番号　特願平6-234681
(22)出願日　平成6年9月29日(1994.9.29)
(65)公開番号　特開平8-99529
(43)公開日　平成8年4月16日(1996.4.16)
審査請求日　平成13年8月29日(2001.8.29)

(73)特許権者　000247166
株式会社ネオックスラボ
愛知県豊田市陣中町２丁目１９番地６
(74)代理人　100064344
弁理士　岡田　英彦
(74)代理人　100091742
弁理士　小玉　秀男
(72)発明者　伊藤　勝
愛知県豊田市衣ケ原３丁目１番地　共和産業株式会社内

審査官　島田　信一

最終頁に続く

(54)【発明の名称】車両用サンバイザ

(57)【特許請求の範囲】
【請求項１】
クッション体に対し、板状芯体と、該板状芯体の周縁部に沿って環状をなす骨枠体とが相互に結合されて内設された車両用サンバイザであって、
前記板状芯体の周縁部の複数箇所には、所要の幅寸法を隔てる切込み部によって挟持片がそれぞれ形成され、
前記各挟持片と前記板状芯体の周縁部とのうち、少なくとも一方の撓みによって前記挟持片と前記板状芯体の周縁部との間に前記骨枠体が挟み込まれて止着されていることを特徴とする車両用サンバイザ。
【発明の詳細な説明】
【０００１】
【産業上の利用分野】
この発明は、サンバイザ本体の変形を防止するために、クッション体に、板状芯体と骨枠体とが相互に結合されて内設された車両用サンバイザに関する。
【０００２】
【従来の技術】
従来、この種の車両用サンバイザにおいて、図５と図６に示すように、骨枠体１２１は金属製線材がサンバイザ本体の形状に対応して環状に折曲形成され、その一隅部に軸受体１２２がスポット溶接などによって固着されている。
また、板状芯体１１１は、段ボール，厚紙等の板材よりなり、骨枠体１２１に嵌込まれる

形状に形成されている。そして、前記骨枠体１２１の枠内に板状芯体１１１が嵌込まれ、所要数の接着テープ１０４が骨枠体１２１から板状芯体１１１にわたって貼着されることで、骨枠体１２１と板状芯体１１１とが結合されている。
前記したように骨枠体１２１と板状芯体１１１とが接着テープ１０４によって結合された後、これら両部材１１１，１２１が表裏半分割されたクッション体の間にサンドイッチ状に内設され、外装皮によって被覆されることで、サンバイザ本体が構成されている。
【０００３】
【発明が解決しようとする課題】
ところで、前記従来のものにおいて、骨枠体１２１と板状芯体１１１と所要数の接着テープ１０４によって結合する作業は多くの手間を必要とし、コスト高となる問題点があった。
この発明の目的は、前記従来の問題点に鑑み、接着テープを用いることなく骨枠体と板状芯体とを容易にかつ手早く結合することができ、コスト低減を図ることができる車両用サンバイザを提供することである。
【０００４】
【課題を解決するための手段】
前記目的を達成するために、この発明は、クッション体に対し、板状芯体と、該板状芯体の周縁部に沿って環状をなす骨枠体とが相互に結合されて内設された車両用サンバイザであって、
前記板状芯体の周縁部の複数箇所には、所要の幅寸法を隔てる切込み部によって挟持片がそれぞれ形成され、
前記各挟持片と前記板状芯体の周縁部とのうち、少なくとも一方の撓みによって挟持片と板状芯体の周縁部との間に前記骨枠体が挟み込まれて結合されている。
【０００５】
【作用】
前記したように構成される車両用サンバイザにおいて、板状芯体の各挟持片と同板状芯体の周縁部とのうちの少なくとも一方の撓みによって前記挟持片と板状芯体の周縁部との間に骨枠体を挟み込むことで、板状芯体と骨枠体とを容易にかつ手早く結合することができる。
【０００６】
【実施例】
以下、この発明の一実施例を図１～図４にしたがって説明する。
車両用サンバイザを正断面で表した図３及び側断面で表した図４において、サンバイザ本体１は、板状芯体１１，骨枠体２１，クッション体２及び外装皮３を主体として構成されている。
【０００７】
前記クッション体２は、ポリウレタンホームのようなクッション性を有する発泡ゴム，発泡樹脂等のシート材が表裏２分割されて構成され、同クッション体２には、前記骨枠体２１及び板状芯体１１が互いに結合された状態でサンドイッチ状に内設されている。
そして、前記クッション体２が外装皮３によって被覆されることで、サンバイザ本体１が構成される。
【０００８】
さて、図１と図２に示すように、前記板状芯体１１は、段ボール，厚紙等の板材が所要とする形状に裁断されてなるもので、同板状芯体１１の周縁部の上下及び左右の複数箇所には、所要の幅寸法を隔てる切込み部１２によって挟持片１３がそれぞれ形成されている。
骨枠体２１は、金属製線材がサンバイザ本体１の形状に対応して折曲されてなるもので、前記板状芯体１１の周縁部に沿って環状をなし、その一隅部に軸受体２２がスポット溶接などによって固着されている。
【０００９】
そして、図１と図２に示すように、前記板状芯体１１の各挟持片１３と同板状芯体１１の

周縁部１１ａとが互いに開く方向に弾性的に撓んだ状態において、これら挟持片１３と板状芯体１１の周縁部１１ａとの間に骨枠体２１が挟み込まれることで、板状芯体１１と骨枠体２１とが結合されるようになっている。
なお、前記実施例においては、板状芯体１１の各挟持片１３と同板状芯体１１の周縁部１１ａとを互いに開く方向にそれぞれ撓ませたが、これに限るものではなく、挟持片１３のみを撓ませて挟持片１３と板状芯体１１の周縁部１１ａとの間に骨枠体２１を挟み込んで結合してもよく、板状芯体１１の周縁部１１ａのみを撓ませて、その周縁部１１ａと挟持片１３との間に骨枠体２１を挟み込んで結合してもよい。

【００１０】

【発明の効果】

以上述べたように、この発明によれば、板状芯体の挟持片と同板状芯体の周縁部との間に骨枠体を挟み込むことで、板状芯体と骨枠体とを容易にかつ手早く止着できるため、従来と異なり接着テープを用いて貼付ける煩わしさを解消してコスト低減を図ることができる。

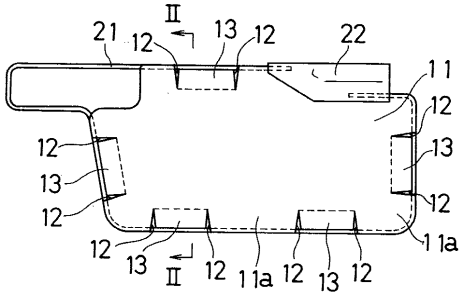
【図面の簡単な説明】

【図１】この発明の一実施例の板状芯体と骨枠体とを結合した状態を示す正面図である。
【図２】同じく図１のＩＩ－ＩＩ線断面図である。
【図３】同じくサンバイザ本体を示す正面図である。
【図４】同じく図３のＩＶ－ＩＶ線断面図である。
【図５】従来の板状芯体と骨枠体とを接着テープによって結合した状態を示す正面図である。
【図６】同じく図５のＶＩ－ＶＩ線断面図である。

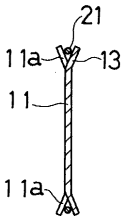
【符号の説明】

１　サンバイザ本体
２　クッション体
１１　板状芯体
１１ａ　周縁部
１２　切込み部
１３　挟持片
２１　骨枠体

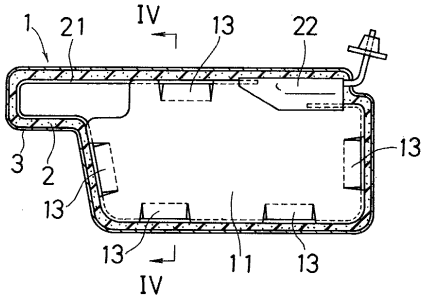
【図１】



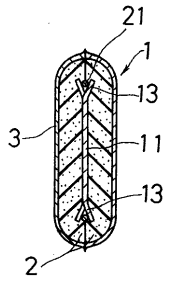
【図２】



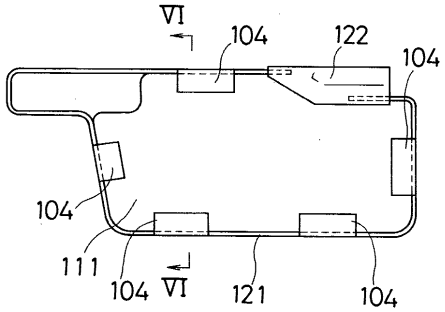
【図３】



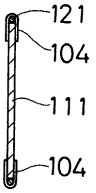
【図４】



【図５】



【図６】



フロントページの続き

(56)参考文献 実開平０３－００８９１８（ＪＰ，Ｕ）
実開昭６１－１１３０１３（ＪＰ，Ｕ）
実開昭６２－０３１５１７（ＪＰ，Ｕ）
実開平１－９６３２１（ＪＰ，Ｕ）

(58)調査した分野(Int.Cl.[7]，ＤＢ名)
B60J 3/00
B60J 3/02